

令和5年度 卒後アンケート（2021年度卒業生）結果報告

卒後1年を経過した卒業生に対して、本学部のディプロマ・ポリシーの活用度や本学教育に対する意見、職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を実施した。

1. 対象および方法

対象者：2021年度卒業生 105名

対象者は、COVID-19感染拡大の影響により、3・4学年次において遠隔授業および臨地実習の日数・内容の制限があった学年である。

調査期間：令和5年7月3日(月)～8月4日(金)正午（再通知：7月20日(木)）

方法：無記名 web 調査

卒業生の自宅へ QR コード付きの依頼文を郵送し、Google フォームへの入力を依頼した。今年度は、返礼として 500 円の Amazon ギフト券の送付を行うこととした。回収数が少なかった（25 件）ため、愛知医科大学病院へ就職した卒業生（45 名）に対し、院内のメールボックスへ依頼文を 1 回配布した。

2. KEY POINTS

- 卒業生のディプロマ・ポリシーの活用状況はほとんどの項目で 75%を超えており、達成度は高かった。一方で、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」は、他の項目と比較して活用状況が低かった。
- 本学の教育に対し、大学病院が隣接した環境での教育に満足している一方で、実践的な看護技術について不足していると感じていた。
- 卒後1年で、「仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験」、「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」、「他の職員と関係を維持する経験」において質の高い経験をしていた。
- 卒業生が大学生活の中で社会人になって最も役立っていると思っていることは「大学での同級生との交流」であった。
- 80%以上の卒業生が仕事のやりがいを感じていると回答したが、半数以上の卒業生が現在の職場からの離職を考えていた。

3. 結果

回収数は 37 名（昨年度 27 名）、回収率 35%であった。

1) 対象者の基本属性

対象 37 名のうち、女性は 36 名（97%）、現在看護師として就業している対象は 35 名（95%）であり、35 名のうち 1 名が非正規雇用であった。就業していない対象のうち、1 名は休職中、1 名は助産大学院進学中であった。

2) ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の活用状況（項目 1～9）（表 1）

ディプロマ・ポリシー9項目の活用状況を「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で調査した。ほとんどの項目で、「そう思う」「少しそう思う」と回答した卒業生が 75%を超えており、ディプロマ・ポリシーの達成度は高いと考えられた。一方で「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」に関しては、25%を超える卒業生が「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答しており、他の項目と比較して達成度がやや低い結果であった。

表1 ディプロマポリシーの活用状況

		N=37			
		4	3	2	1
		そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	そう思わない
		(%)	(%)	(%)	(%)
1	看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる	10 (27.0)	21 (56.8)	5 (13.5)	1 (2.7)
2	看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている	9 (24.3)	25 (67.6)	3 (8.1)	0 (0.0)
3	看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる	5 (13.5)	22 (59.5)	9 (24.3)	1 (2.7)
4	看護専門職者として倫理的に思考することができる	6 (16.2)	28 (75.7)	3 (8.1)	0 (0.0)
5	看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している	7 (18.9)	24 (64.9)	5 (13.5)	1 (2.7)
6	看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている	9 (24.3)	21 (56.8)	6 (16.2)	1 (2.7)
7	あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる	11 (29.7)	22 (59.5)	3 (8.1)	1 (2.7)
8	看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている	9 (24.3)	16 (43.2)	11 (29.7)	1 (2.7)
9	看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる	12 (32.4)	19 (51.4)	6 (16.2)	0 (0.0)

3) 現在看護師として働く中で、本学の教育で満足・評価している点、不足している点について。また、本学での学びが、現在の自身の看護に取り組む姿勢・態度や現在自身に必要な能力・技術にどのような影響を及ぼしているか。(自由記載)

上記設問に対して、次のような回答が得られた。満足している点としては、大学病院が隣接していることによる実習等の教育の充実、教員の教育姿勢などが挙げられた。不足している点としては、臨床実践につながる看護技術(採血、輸液ポンプの取り扱い、吸引、点滴患者の更衣等)、臨地実習時間の不足等が挙げられた。また、本学での学びの影響としては、実習での学びを現場で活かすことができている、基礎的な看護技術の習得、卒業研究が理想の看護への意欲向上等、実習・演習・卒業研究等本学における教育全般が挙げられているとともに、個性を意識した看護の提供・学習姿勢も挙げられた。

4) 職業経験の質について(表2)

卒業生の職業経験の質に関する得点は、 109.9 ± 20.2 点(平均 $\pm$ SD)であった。なお、昨年度は 111.8 ± 17.3 点、一昨年度は平均 107.6 ± 17.5 点であり、大きな変化は見られなかった。

卒業生の職業経験の質に関する得点が高かった項目は、下位尺度Ⅰ「仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験」、下位尺度Ⅱ「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」、下位尺度Ⅲ「他の職員と関係を維持する経験」であった。一方で、下位尺度Ⅴ「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験」、次いで下位尺度Ⅳ「看護職としての価値基準を確立する経験」の質得点が低かった。

文献) 鈴木美和(2004): 看護職者の職業経験の質に関する研究 ―測定用具「看護職者職業経験の質評価尺度」の開発―、看護教育学研究、13 (1)、37-50。

表2 職業経験評価尺度-臨床看護師用-の結果

		N=37			
		平均	標準偏差	最大	最小
I	仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験	18.9	4.0	25	8
II	看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験	19.1	4.0	25	5
III	他の職員と関係を維持する経験	19.2	3.7	25	5
IV	看護職としての価値基準を確立する経験	17.2	4.6	25	5
V	発達課題の達成と職業の継続を両立する経験	17.0	4.9	25	7
VI	迷いながらも職業を継続する経験	18.4	3.5	25	10
合計		109.9	20.2	150	61

5) 現在の職場で必要とされている能力とそのために大学で学んでおくよかったこと（自由記載）。

上記設問に対して、次のような回答が得られた。必要とされる能力は、コミュニケーション力、アセスメント力、相談する力、主体性などがあげられた。また、そのためには疾患に対する理解、アセスメント力、多重課題による優先順位をつけることなどを、大学で学んでおきたかったということがあげられた。

6) 大学生活を振り返ったときに、社会人として役立っていること（表3）

大学生活を振り返ったときに社会人として役立っていることを、14項目について「役立っている」から「役立っていない」までの5段階で調査した。

14項目中最も「役立っている」と回答した卒業生の割合が多かった項目は「11. 大学での同級生との交流」17名（45.9%）であり、次いで「13. 大学の部活動やサークルでの交流」9名（24.3%）、「1. 大学生活全般」、「5. 大学での研究的思考の学び（教養ゼミ・卒業研究Ⅰ、Ⅱなど）」、「12. 大学での先輩との交流」8名（21.6%）であった。大学生活の中で得た人間関係や社会経験が、卒業後に役立っているという結果は昨年度と同等であった。加えて、1学年次から継続して行っている研究的思考の学びも良い影響を与えていることが伺えた。「役立っている」と回答した卒業生の割合が最も低かった項目は「8. 大学からの短期留学」、「10. 事務職員との交流」、「14. 他大学の学生との交流」で3名（8.1%）であった。昨年度と比較するとやや増加傾向にあるが、大学生活の大部分で新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた学年であり、大学行事や登校機会の減少が影響している可能性がある。

表3 大学生活のうち社会人として役立っていること

		N=37				
		5	4	3	2	1
		役立っている	少し役立っている	どちらともいえない	役立っていない	役立っていない
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
1	大学生活全般	8 (21.6)	22 (59.5)	6 (16.2)	1 (2.7)	0 (0.0)
2	大学での講義における学修内容	7 (18.9)	21 (56.8)	6 (16.2)	3 (8.1)	0 (0.0)
3	大学での演習における学修内容	6 (16.2)	20 (54.1)	6 (16.2)	4 (10.8)	1 (2.7)
4	大学の実習で修得した看護実践能力	5 (13.5)	17 (45.9)	10 (27.0)	3 (8.1)	2 (5.4)
5	大学での研究的思考の学び（教養ゼミ・卒業研究Ⅰ、Ⅱなど）	8 (21.6)	15 (40.5)	8 (21.6)	6 (16.2)	0 (0.0)
6	大学での看護実践能力修得のためのプログラム（看護総合・卒業前研修など）	6 (16.2)	17 (45.9)	7 (18.9)	5 (13.5)	2 (5.4)
7	大学でのボランティア活動	4 (10.8)	13 (35.1)	14 (37.8)	4 (10.8)	2 (5.4)
8	大学からの短期留学	3 (8.1)	7 (18.9)	18 (48.6)	2 (5.4)	7 (18.9)
9	教員との交流	7 (18.9)	15 (40.5)	8 (21.6)	5 (13.5)	2 (5.4)
10	事務職員との交流	3 (8.1)	11 (29.7)	12 (32.4)	6 (16.2)	5 (13.5)
11	大学での同級生との交流	17 (45.9)	16 (43.2)	2 (5.4)	2 (5.4)	0 (0.0)
12	大学での先輩との交流	8 (21.6)	15 (40.5)	9 (24.3)	1 (2.7)	4 (10.8)
13	大学の部活動やサークルでの交流	9 (24.3)	14 (37.8)	8 (21.6)	2 (5.4)	4 (10.8)
14	他大学の学生との交流	3 (8.1)	12 (32.4)	14 (37.8)	0 (0.0)	8 (21.6)

7) 現在の仕事のやりがいと満足度、離職、進学希望の有無

卒業生に対して、現在の仕事のやりがいを「大変感じている」から「全く感じていない」、仕事の満足度について「大変満足」から「全く満足していない」の各々4段階で調査した。80%以上の卒業生が仕事のやりがいについて、「大変感じている」、「感じている」と回答した。仕事の満足度については、「大変満足」「満足」と回答した卒業生は57%（昨年度63%）であった。

一方で、「仕事をやめようと考えていますか」という問いに対して、離職する予定であると回答した卒業生は5名（13.5%）であった。5名中4名が今後の予定について、看護師として正規雇用で別の病院・クリニックに勤

務すると回答し、1名は看護師として病院やクリニック以外の施設で勤務すると回答した。

離職する予定であると答えた5名のディプロマ・ポリシーの活用状況及び職業経験評価尺度の回答について、以下に示す(表4・5)。

表4 離職予定5名のディプロマポリシーの活用状況

		N=5			
		4	3	2	1
		そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	そう思わない
		(%)	(%)	(%)	(%)
1	看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
2	看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
3	看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	1 (20.0)
4	看護専門職者として倫理的に思考することができる	0 (0.0)	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)
5	看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している	0 (0.0)	4 (80.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
6	看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
7	あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる	2 (40.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
8	看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている	1 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	0 (0.0)
9	看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	0 (0.0)

表5 離職予定5名の職業経験評価尺度-臨床看護師用-の結果

		N=5			
		平均	標準偏差	最大	最小
I	仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験	17.8	2.1	20	14
II	看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験	16.2	3.7	20	10
III	他の職員と関係を維持する経験	17.6	3.0	20	12
IV	看護職としての価値基準を確立する経験	14.8	5.3	20	7
V	発達課題の達成と職業の継続を両立する経験	18.4	5.8	23	7
VI	迷いながらも職業を継続する経験	16.6	4.0	20	10
合計		101.4	19.3	119	66

ディプロマ・ポリシーの活用状況における離職予定5名の特徴として、項目8について達成度が低い状況は全体の結果とほぼ同等であるものの、項目3の達成度が全体より低くさらに項目4「看護専門職者として倫理的に思考することができる」の達成度が低い傾向であることが挙げられる。また、職業経験の質においては、ほとんどの項目において全体と比較して低い値であり、離職の意思と職業経験の関連が示唆された。

23名(62%)の卒業生が、離職を考えているが今すぐは辞めないと回答した。卒業生らは仕事のやりがいを感じていながらも、現在の職場を将来的には離職したいという希望を持っていることが伺えた。また、大学院の進学に興味があると回答した卒業生は3名であった。昨年度の27回答中5名と比較し、減少傾向にあった。

卒後本学に希望することについて複数回答で調査した。最も多かった回答は、「転職に関する情報提供」、次いで「卒後教育プログラム」であった。

8) 愛知医科大学の卒業生で良かったこと・愛知医科大学の「伝統」を感じるもの(こと)(自由記載)

上記設問に対して、次のような回答があった。愛知医科大学の卒業生として良かったことは、友人や先輩後輩との関係、教員との関係等であった。愛知医科大学の「伝統」を感じるもの(こと)は、歴史があること、先輩から職場の情報を事前に得られたこと等が挙げられた。この項目においても、学生時代の人間関係について、肯定的にとらえている卒業生が多くみられた。

4. まとめ

本調査では、卒後1年が経過した卒業生に、現在の就業状況、ディプロマ・ポリシーの達成状況および職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を行った。卒業生らのディプロマ・ポリシーの達成度は、9項目中ほとんどの項目で達成状況について前向きな回答が多く、おおむね達成できているものと考えられた。また職業経験については、昨年度までと大きな変化はなかった。本学の教育で満足している点として、大学病院が隣接していることによる教育の充実、教員の教育姿勢などが挙げられ、不足している点としては、臨床実践につながる看護技術および臨地実習時間の不足等が挙げられた。対象となった卒業生は、3・4学年次に COVID-19 感染拡大のために遠隔授業・臨地実習時間の短縮等の制限を受けており、そのことが本調査の結果に影響を与えた可能性がある。

半数以上の卒業生が将来的な離職を考えていたが、仕事に対してはほとんどの卒業生がやりがいを感じていた。卒後本学に希望することについて「転職に関する情報提供」が挙げられており、大学院への進学希望をしている卒業生がいることも含め、今後のキャリアについて考えている時期であることが伺えた。また、「卒後教育プログラム」も希望することとして挙げられており、本学における新人看護師を対象としたセミナー等の企画も考慮すべきである。また、対象者37名中5名が離職を希望しており、離職を希望する卒業生の回答の特徴として、ディプロマ・ポリシーの項目3と4の達成度が低く、看護師としての職業経験の質も全体と比較して低い傾向であった。

5. 見出された課題と今後の対応策

本調査で見いだされた課題として、学部教育における実践的な看護技術についての不足が挙げられる。本調査の対象者は、3・4学年次に COVID-19 感染拡大の影響を受けた学年であり、臨床に近い教育が行えていなかったことに影響を受けている可能性がある。しかし、本調査で見出された課題は、高い看護実践力の育成という看護基礎教育における重要なポイントにつながる。基本的な知識と思考力の強化、多重課題の中での優先順位といった総合的な判断力を育む教育を充実させると同時に、科目間連携を推進し、複合的な看護をいかに段階的に教育するかを検討が必要となる。また、実習における教育の充実に向けた実習施設との協議等により、臨床の現場に近い実践的な教育を行っていく必要がある。

本年度の調査では離職を決めている卒業生が5名おり、回答の特徴としてディプロマ・ポリシーの科学的・論理的思考の達成度が低く、職業経験の質が低い傾向であったことが挙げられた。臨床に近い教育に向けて対応策を講じ、技術面だけでなく科学的・論理的な思考を強化する中で、教育と臨床のギャップを少なくしていくことも重要であると考えられる。

なお、本年度の卒後アンケートは37名から回答があり回収率は35%であった。昨年度の26%からは増加しており、今年度行った謝礼品送付の効果が示唆されるが、依然として回収率が低い来年度の実施に向けて改善策を講じる必要がある。今年度は、調査票の内容の吟味し質問項目を修正することで、具体的な回答が得られた。本調査の結果は学部教育にフィードバックし、対応を実践していく。

2023 年度 愛知医科大学卒業生の就職先に対する調査 集計結果報告

卒業生の就職先から本学卒業生のディプロマ・ポリシーの到達度について第三者評価を得ることを目的に、令和 4 年度に本学看護学部卒業生が入職した愛知医科大学病院の病棟管理者(師長)および、外部施設の教育担当者に対し、本学卒業生(臨床 2 年目)の状況等について調査を実施した。

1. 対象および方法

1) 対象者

平成 29 年度カリキュラムを履修した卒業生のうち卒後 1 年が経過した者(令和 3 年度卒業生)を受け入れている愛知医科大学病院の病棟師長および、外部施設の教育担当者。

なお今年度の調査依頼は、本学卒業生が令和 4 年度に看護師・保健師として就職した施設とする(助産師課程の学校は除く)。

2) 調査期間

2023 年 7 月 3 日(月)～8 月 4 日(金)

3) 方法

Web アンケート

2. 調査内容

卒業生のディプロマ・ポリシー(以下、DP)の到達度について、社会人基礎力の項目を用いて到達度およびさらなる修得が望まれる能力を問う。また、卒業生の動向について退職者の退職理由を問う。なお、今回活用する社会人基礎力の項目は、本学の DP の内容が網羅されており、かつ臨床でも活用されている指標であることから理解が得られやすいと考え用いた。また、退職理由については、厚生労働省、日本看護協会の看護師の離職に関する調査結果から上位のものを抽出した。

3. 結果

愛知医科大学病院 24 部署ならびに外部施設 24 か所(内、保健センター等 3 か所含む)計 48 か所に配布し、回答のあった 40 件を有効回答とした(有効回答率 83.3%)。

1) 本学の卒業生(臨床 2 年目)の社会人基礎力の到達度の評価について

本学卒業生の社会人基礎力の到達度について、“いつもできている”“ときどきできている”を合わせた回答件数で示す。最も到達度が高い項目は「1. 与えられた役割や業務について疑問があるときは質問し理解しようとしている：【物事に進んで取り組む力】」の 32 件であった。その他高かった項目は「2. 業務遂行上困難なときその他のメンバーに協力を依頼している：【他人に働きかけ巻き込む力】」の 29 件、「12. 自分の長所、短所を理解し調和を保つよう努力している：【ストレスの発生源に対応する力】」の 26 件、「8. 患者・家族(対象者)の苦情や不平に対してその真意を理解しようとしている：【相手の意見を丁寧に聴く力】」の 25 件、「10. 所属施設・部署の目標、割り当てられた業務を理解し、仕事の優先度をつけている：【自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力】」の 24 件であった。一方、達成度

が低い項目は、「6. 日常業務のひとつひとつにもっと良いやり方や効率的な方法はないかといった視点で取り組んでいる：【新しい価値を生み出す力】」が 10 件、「7. 結論と経過、自分の意見を区別して説明している：【自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】」が 15 件であった。

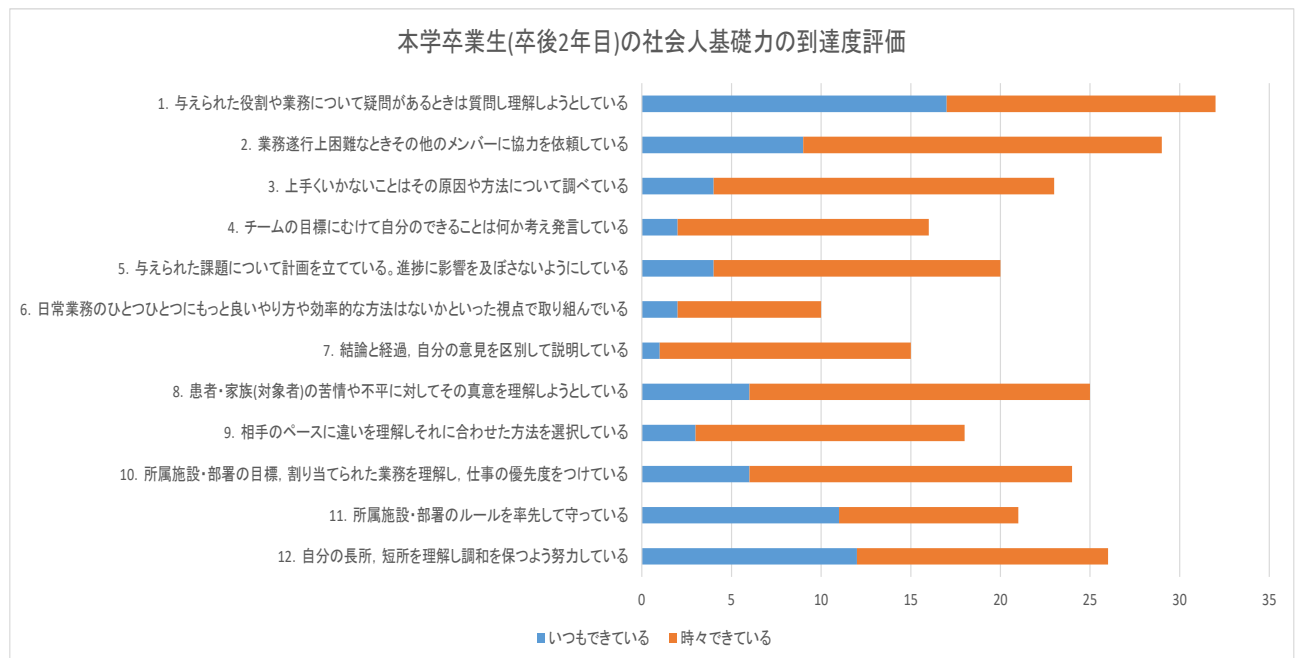


図 1 本学の卒業生(臨床2年目)の社会人基礎力の到達度の評価

2) 本学の卒業生（臨床2年目）において、さらなる修得が望まれる能力について

さらなる修得が望まれる能力について、最も回答の多かった能力は【1. 物事に進んで取り組む力】であり、次いで【3. 目的を設定し確実に実行する力】、【2. 他人に働きかけ巻き込む力】、【8. 相手の意見を丁寧に聴く力】であった。

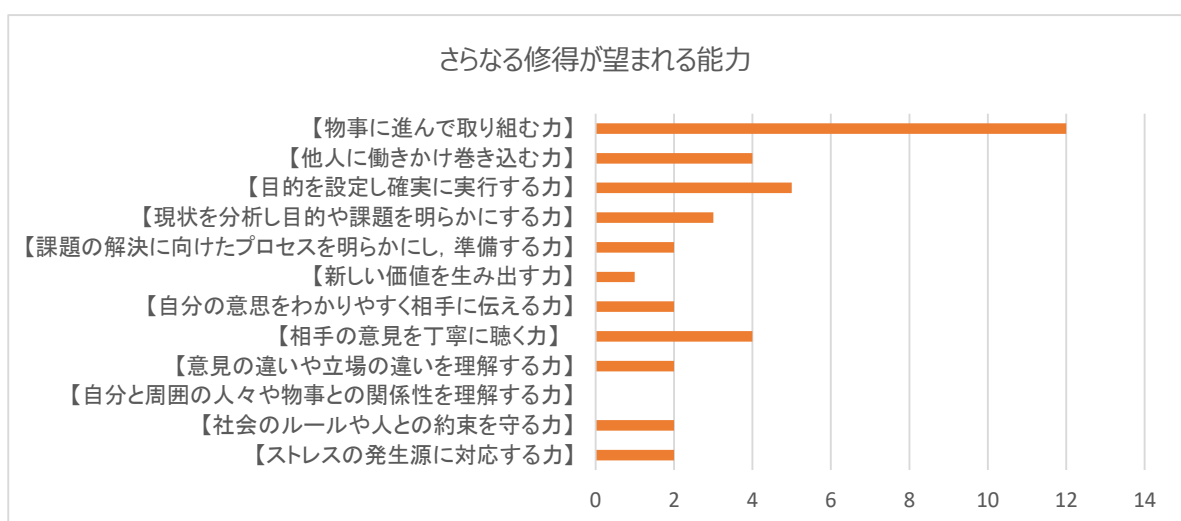


図 2 本学卒業生のさらなる修得が望まれる能力

3) すでに退職した本学の卒業生（臨床2年目）がいる場合の退職に至った理由について

40件中、30件については“退職者はいない”と回答していた。退職者のいた部署/施設において退職に至った理由は、【身体的/精神的な健康問題のため】4件、【職場内での人間関係】2件、【他施設への興味】、【勤務体制/夜勤への負担感】、【責任の重圧/医療事故への不安】が1件ずつであった。

4) 本学の卒業生（臨床2年目）に対して気づいた点について（自由記載）※一部抜粋

- ・物怖じせずに発言でき、仕事に取り組む姿勢が良い
- ・素直で、ハキハキしている。わからない事は、質問をして問題解決に努めている。
- ・遅刻、欠勤がなく、体調管理ができています
- ・真摯に業務に取り組んでおり、同僚からの信頼も厚い。
- ・言葉づかいや対応で注意されてしまうこともあるが、その時の対応を振り返ることはできている
- ・一人で判断して行動してしまう傾向があり、ヒヤリとする場面が時折見られる。
- ・自分が困っていること、思い、状況を発信することが難しく、全部抱え込みどうにもならなくなる状態が見受けられる（貴大学に限ったことではないが）。
- ・パーソナルスペースがやや近いと感じる
- ・協調性あるが、自己主張はあまり無い。
- ・学生生活からコロナ禍だったこともあり、対人業務での対象者に対する姿勢が少し配慮に欠ける様子が見受けられる。自身の意見をハキハキ言えることは良い部分だが、他人の意見を聞ける柔軟性も今後身に付けていけるとよい能力かと思う。
- ・全てのことにに対して受け身の姿勢である。積極的に物事に向うのでは無く、声を掛けてもらえるまで待つ事が多い。学びを生かし、新たな事に取り組む姿勢に欠ける。
- ・徐々に業務には慣れてきてはいるが、臨機応変に対応することが苦手で、真面目に取り組む反面、周囲との連携や自ら働きかけることには困難さを感じているようである。
- ・社会人基礎力がとても低いと感じる。例えば提出物の期限が全く守れない、院内メールでの報告事項を確認していない、問題が起こった時に報告できないなど、1年以上が経過した現在でも改善が見られない。覇気がないのもとても心配。
- ・いろいろな場面で定型の質問には答えられるが、個別を考える、場面を考えて質問ことが難しい。

5) 本学に期待することや要望事項について（自由記載）※一部抜粋

- ・学生の中から看護のやりがいや楽しさを学べる良いと思う。
- ・看護師は命を扱う職業であり、就職してからのリアリティショックが大きい職業である。そこを乗り越えられるちからと、また、受け入れる側の準備が重要であると考えます。社会人基礎力を備えているだけでも現場での適応力が変わってくると思われ、その中でもチームで働く力が重要になっていくため、失敗を恐れず取り組んでいくことができるように学生生活を過ごしてほしい。
- ・臨床実習と同じ経験を積めるVR学習の導入によって、より実践的な学びが期待できるのではないかと。
- ・生涯学習を行う姿勢や、賃金をもらって働くことの責任など、社会人基礎力に関わる教育を、もう少し厚く行なっていただけるとありがたい

- ・学生の中に社会人、職業人として看護に向き合う姿勢について指導し、社会に送り出して頂きたい。
- ・患者さんと接すること・ご家族への対応を含めたコミュニケーション能力は必要な要素だと思うので、様々な人とのコミュニケーション（アルバイト経験などの社会性含め）を経験できると良い。
- ・本人の仕事の適正としてスキルアップが出来ないことは本人にとって苦しいのではないかと思ってしまうので、できるならば、大学在学中に適正などがわかり、就職活動にいかせるとよいのではと思う。

4. まとめ

1) 本学卒業生(卒後2年目)のディプロマ・ポリシーの到達度について

今回の調査結果から、本学の令和3年度卒業生(卒後2年目)は、物事に進んで取り組むことおよび、他人に働きかけ巻き込むことができると評価された。一方で、与えられたことはできるが、物事に新たな価値を見いだすことや自分の意思をわかりやすく相手に伝えることは十分ではないという特徴が明らかになった。

社会人基礎力の【新しい価値を生み出す力】【自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】の能力に対する評価が低い結果であったことと、自由記述からも、今回の卒業生の特徴として、仲間(同期)とは協力することはできるが、自ら考え行動することが難しいことや、実際の状況を相手にわかりやすく伝えることが難しいことが挙げられた。今回の卒業生は在学中に COVID-19 の影響を強く受けた学生たちであり、遠隔講義や実習の制限などによって対面でのコミュニケーションの経験が不足していたことも影響している可能性が考えられる。これらのことから、本学 DP の「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」の項目について修得が十分でなかった可能性が示された。

また、提出物の期限が守れない、共有すべき情報を確認していない、報告ができない、適切な言葉遣いができていない、などといった、社会人としての基本的な姿勢が身についていないことが示され、社会人基礎力の【社会のルールや人との約束を守る力】を強化する必要性が示された。

2) 今後の教育上の課題

本調査および卒後アンケートの結果をふまえ、以下の3点を今後の課題とする。

- (1) 科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができることを強化するために、各科目の講義や演習、実習のプログラム内容や演習方法等の工夫を検討する。
- (2) 与えられたことだけでなく、現状を的確に捉え自ら考え行動する力や、新たな知を創造する力を高められるようにするために、教養ゼミナールや卒業研究などでプレゼンテーションの機会をもち、他者にわかりやすく伝える力を身につけるとともに、多様な価値観の理解や看護学の発展に向けた主体的な行動を促すことを検討する。次年度の調査以降は、卒業研究において全卒業生が卒業論文をまとめているため、これらの能力の向上を期待したい。
- (3) 看護学生として社会のルールや約束を守ることは不可欠であるため、学生委員会とも協力をしながら学年ガイダンスで必ず掲示物やメール等を確認することを強調してアナウンスするとともに、各領域においても提出物の期限を徹底するなど、学生の中からこれらのルールが確実に身につけられるような指導方策を検討する。